



# PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

## 胎児も

### 学習できる

赤ん坊は子宮に在る間に学習できると私は話しました。ヴァーニー博士は、妊娠6ヶ月から28週目頃に、ほぼ確実に特定の詳細な記憶が胎児に生まれると確信しています。生後まもなく記憶が生じる事は確かに分かっています。

一九八〇年六月の「サイエンス」誌に、アンソニー・デキャスパイは、ある実験を、聞き慣れた音に対する嗜好」と題して語っています。出産の前に母親はある話を胎児に何度も聞かせました。そして男の子を出産しました。生まれて24時間以内に赤ん坊はおしゃぶりを与えられました。これは電気につながっていて、赤ん坊のしゃぶるのが速いか遅いかで二つのテープが切り替わるので

す。テープは両方とも母親が話を読んでいるものですが、一つは出産前に読んで聞かせたもので、もう一つはそれとは別の話でした。これは、しゃぶる事によって赤ん坊に二つの話のどちらかを聞く機会を与えるものでした。その結果何が起こったと思えますか？デキャスパイ博士によると、どのケースにおいても赤ん坊は子宮にいた時間聞いた話を選んだというのです。

「科学的な根拠からみて、胎児は喜びやストレスのある外界から安全な囲いから守られているどころか、むしろさらされており、自分や母親の周囲に起こる事に影響を受けている。」と、オールズ博士は話しています。博士は、恐怖や怒り、不安や、喜びなどを感じた時に出る神経ホルモンが血管を通じて胎児にも流れる事に言及しています。

母親が妊娠中に継続的なストレス下に置かれた場合、生まれてきた子供には生後一年で神経質、過度に行動的、そして概して不機嫌などの傾向がみられます。

宇宙間に踏み出す時、どうやって母船とつながっているでしょうか？酸素を送っているへその緒のコードによってですね。同じように、私達の小さな宇宙飛行士さんも酸素をもらっているへその緒によってお母さんとながつているのですよ。

赤ん坊が母体の一部であるという論は科学的には何の根拠もないと博士は言います。科学的証明のどれを見ても胎児と母体との関係はちょうど宇宙飛行士と宇宙船との関係のようなものであるという事実を示しているのです。つまり、似ている点があります。それは母体が胎児にするように宇宙船が宇宙飛行士に生命維持システムを与えるという点においてのみなのです。

さて、もう一つの類似点を博士は述べませんでしたが、この話を子ども達にすると、私はよく話す事です。覚えているかも知れませんね。宇宙飛行士が宇宙服を着、ハッチを出て宇

J・C・ウィルキー  
医学博士

## 中絶は父親にも 影響を及ぼす

### 「父性喪失」

千人の男性を対象に行われた調査によると、その47%が子どもを中絶で失った結果、後々までも、感情的、かつ精神的なさまざまな問題に苦悩するだろうと予測されている。39%の男性はそのような精神的な問題を自分らが持つだろう事に関して、ただ漠然とした感覚を抱いている。彼らは女性の中絶に対する権利を支持しなければならぬという必要性を感じながらも、その52%が中絶が行われた日、つまり子どもを命日に、しばしば、その子をおぼえて言っている。

中絶経験後、何ヶ月も何年も経っている75人の男

性を対象に行われた意識調査では、その60%もが亡くなった子どもをしばしば考えると言っている。つまり、中絶に関して彼らが感じた意識は、時と共に薄れはしない。これらの調査が示しているものは、男性もひそかに控えめではあるけれども、その父性愛の行き場所を失った事を嘆いている。恋人や妻に対して自らの愛情や支えを示してあげなければならぬと感じているからこそ、男性は自分の悲しみを押し隠すために強くあるうとし、気楽に見せようとしているのだ。「彼女には、彼女が受け入れる事のできる範囲の事しか話しません。私は本当はどう感じていたかを話す事は絶対できません。」

HWRFA-pp.162

## 中絶反対の立場

世界の問題のなかで、中絶は最も恐ろしいものです。医学が発達し医学的知識も豊富になってきました。母親の子宮の奥にいる何千もの純真な赤ん坊を暴力的に虐殺することを私達は日々許してしまっています。ただ、法的に許されているというだけで、それは犠牲者からの攻撃を全く受け付けないのです。大抵、子供の母親によって決断された耐え難く、痛々しい殺人です。子宮の中で成長している感情を持った赤ん坊を本当は人間では無いというひどい嘘で、信じ込みやすい大衆を納得させ、中絶というこの忌まわしい行為を覆い隠しているのです。

中絶反対運動はたしかに簡単ではありません。しかし、ほとんどの人は守勢

で戦っているのみです。神からの最大の贈り物である命が、まだ生まれてくる前に破棄されたというこのことを聞く度に、ただ失望に頭を振り、個人的な戦いをしてきただけなのです。

いま、私達がするべき第一の事はまず自分たちの武器をしっかりとつかみ、中絶に抵抗するための動機を探す事です。

選挙の票は、中絶に対する最も強力で有効な武器の一つです。中絶は不要な人間の皆殺しです。中絶を支持する候補者に投票することは、我々の子どもの虐殺が続くことを将来的に確実にしてしまふ法律を積極的に支援することになるのです。立法者達が中絶を支持することで、中絶は世界的に合法なものとして扱われて来ました。課税や公共事業などに関する問題も重要ですが、我々の第一の責任は生命です。我々は、胎児の生命

の権利を毅然と支持することを誓約した候補者には投票してはならないのです。

ペンもまた力強い武器の一つです。政治家に手紙を書き、まだ生まれて来ぬ子ども達を守る法案の提出を急がせましょう。また、新聞や雑誌に記事を書くことも、中絶に対する一般大衆の意識を高めることとなります。

生命擁護団体に参加して中絶と戦うのは特に効果的です。団結によって力を得ることができるよう。現在、数多くの生命擁護団体がひたむきで献身的な数多くの個人によって構成されています。皆、この殺人をなくすために最善を尽くしています。彼らの救命活動には、家を用意したり、カウンセリングをしたり、必死な母親達の出産前の手伝いをしたりする事も含まれており、また他にも多種多様の奉仕活動

があります。しかしながら彼らの努力が金銭的な利益を上げることがほとんどなく、もっぱら寄付に頼って活動しています。寄付がなければ団体は存在することが出来なくなり、更に多くの赤ん坊が死ぬこととなります。この様な団体への寄付は、命を助けることへの、真の積極的な参加となるのです。

我々がひいきにしている医者が中絶を行うかどうか、調べなければなりません。もし行うのであれば、我々は彼らを支持することをやめなければなりません。我々が今まで受けてきたあらゆる治療の側面に満足していても、彼らが行っている中絶が完全にやめられない限り、胎児の命は守られないのです。我々はもっとよく知識を得る様に努めるべきです。中絶を支持する者のよく使う議論は、多くの場合、事実よりも女性への感

情に基づいています。人々は、胎児はただの細胞の固まりであって、人間ではないと自分たちを納得させることによって、生まれる前の子どもを殺すことを正当化しています。しかし、妊娠に関する知識と、胎児の発達の基礎的な知識と、少々の一般常識を持つている人は、生まれる前の生命を支持する立場をもつて、相手を納得させることが出来ます。

子ども達に人間の生命の奇跡を教えることは最大の責任の一つです。子ども達は、どの様な場面においても、人間の生命の価値と神聖さに感謝できるよ

中絶をなくすための戦いは明らかに、長く困難なものです。勝利もあれば挫折もあり、大きな喜びがあれば失望や断念もあるでしょう。でも、最後には、神の意志が勝つでしょう。辛抱強く努力するための勇気を持てるように祈りましょう。

リサ・M・コンティニ

## 欠陥のある胎児

「明日、胎児の処置をしましょう。」

一九七三年の春、私は30才で二人目の子どもを身ごもって妊娠二ヶ月目でした。その時私の目に写る世界は最高に美しく、満ち足りた生活をしていました。二年前、美しい女の赤ん坊に恵まれ、祝福にあふれた日々を送ってきた私はこの二人目の子どもの誕生を非常に楽しみに夢見ていました。しかし、ある日、娘を遊び場に連れて行くこととした時、これまでの幸福感を打ち壊す事になる変化が私の身体に起こったのです。私は胎内に異常を覚え、かかりつけの産科医に電話すると、「すぐ病院に来るようには」と言われました。

検査を終了すると医師は話さなければいけない事があるのでお座りなさい」と言いました。そして、

彼は、胎児は明らかに欠陥があり、今回のあなたの体の不調は、もしこのまま子どもを産むつもりなら、欠陥のある子どもが生まれる事になると自然が警告しているのですよ。」と話しました。医師の言葉を聞きながら、冷たいものが私の体を走るのを感じました。なにしろ、私は医師が胎児の命を助けるため全力を尽くしてくれるものと信じて、彼のもとを訪れたのですから。それなのにより安楽な道を選んでこの罪もない小さな生命を見殺しにするように彼は私に勧めたのです。「明日の朝8時に病院に来なさい。その時処置をしましょう。」と言われ、私はショックでぼうぜんとなって病院を出ました。主人と私は迫り来る出産の日を思っ

て、喜びに満ちていた時でしたので、その言葉で私を取り囲んでいた美しい世界は音をたてて崩れていくよつでした。いったいこの私が、生命の源である神を信じている私が、どうしてそんな事が出来るのでしょうか。私の主治医が、いやそれ以外のどんな人間でも、愛の結晶の命をこの世から消し去るよう指示する権利があるのでしょうか。

私は医師に電話をかけ、翌日病院に行くつもりがない事を告げました。「生まれた子どもにどんな欠陥がある」と責任は持たないよ」と彼は言いました。それで、私は次のように答ました。「どんな未来が待ち受けようと覚悟はしています。もし私に欠陥のある子どもを授けるのが神様の意志なら、同時に神様はこの試練を耐え抜くだけの思いやりと強さをも私に授けて下さるで

しょう。」その後7ヶ月間神に祈り続けました。神の御意志でおなかにいる子どもが最初の娘と同じように健康に生まれますようにと。

一九七三年十一月二六日、私の祈りに対する答が返され、私達は美しい男児に恵まれました。医師は病室に入つて来て、たいして恥じ入らずに、赤ん坊のただ一つの欠陥は右手の人差し指の爪がないだけだったと私に告げました。私はこの時から中絶で葬られた多くの罪のない生命の事を考えずにいれなくなりました。どれだけ美しい生命が、誰かの断定的な判断によつて失われてしまった事か！この欠陥だらけの世の中に、何か欠陥を持って生まれて来るかもしれないというだけで。

## 子どもの

### いない町

一九四三年の事。アメリカのB 24戦闘機が、アドルフ・ヒットラー率いるドイツを襲撃後、イギリス西部にある第4空軍本部基地へ戻つてきた。操縦士は濃い霧のため予定していた滑走路を見誤り、飛行場に近い小さな町の学校に激突した。学校ではちょうど授業が始まったところで、飛行機の乗員も生徒達も全滅だった。皆、忌まわしい戦争の犠牲者である。

数カ月後、同基地に兵士として配置された私は、あの惨事の時、町にいた人達とも知り合いになった。こんな悲しい町は見た事がない。亡くなった子ども達の慰霊も痛々しい。しかも、住人と話すうちに彼らの悲しみが計り知れないほど深い事を思い知らされた。

れた。

ある母親は「私も年だし、もう子どもは望めません。例えそうじゃなくても、夫も私も又いちから始めようという気力もないのですから」と泣きながら話してくれた。

町役場のある人が、住人が抱えている思いをこんなふう語ってくれた。「戦争のせいで、新しい学校を建てるまでに何年もかかりそうだ。町には一人も子どもがいらない。子ども達がいてこそ、学校をつくる目的がある。彼らは町の未来だ。彼らが大人になって我々に代わつて町の産業を引き継いでくれるのだ。だが今の状態では、我々が死ねば町も一緒に死んでしまう。この町の事を懐かしんだり住人の誰かを思い出してくれる人もいない。我々は永久に忘れ去られてしまつんだ」子どもがいない町を訪ねたのは生まれて初めて

だった。幸い、私には子どもも孫もいる。けれども最近、わが国でも毎年何百もの胎児を作為的に処分していると聞くにつけ、あのイギリスの町を思い出さずにはいられない。中絶規制を強く呼びかけている、

イリノイ州下院議員のヘンリー・ハイド氏は「近い将来、歯医者や予防接種に行くかのように中絶をすすめる時代が来るのではないかと懸念しています」と語っている、中絶とは胎児を傷つけ、破片に切り刻んでしまふ事だ。なのに後悔するどころか、親になる苦労や負担から逃れようと法的権利を高らかに主張して小さな人権を下水と一緒に流してしまつていく。この殺害は米国だけに限った事ではない、世界には更にひどい状況の国もある、例えばインドでは女性性は劣っている身分で、男性の子孫が優れていると

ペギー・

キャヒルバイオリ

考えられている。超音波検査機の普及によりこれから母となる女性は、子どもの性別を調べてもらう事が出来る。検査の結果、不運にも女だったら中絶するという。

科学が進歩を続け、中絶が更に広い範囲で行われるようになった、次なる科学的解決の手段としては多分、妊娠を望むとき以外は確固たる避妊をするしかないだろう。だが、従来  
の避妊法では、私達がかつて考えていた以上に成功率は低いと思われる。

私達が信頼している科学は完全無欠だろうか？  
そうは思えない。種の保存をこのまま盲目的に科学に託しては、いつか核戦争による大決戦よりも恐ろしい終末がやってくるにちがいない。素晴らしい地球にかつて生息していた種が、突然消え去り、二度と現れなくなってしまうたよつに。

子どものいない世の中について、イギリスの小さな町の悲しみや悲嘆や絶望について考えてもらいたい。又、未来のない世界や我々を思い出してくれる人の存在しない世の中について想像してほしい。  
ぜひとも考えてほしい。

フランク・

C・グリフィス